

## 6. 損益計算書

(単位：百万円)

科 目	2022年度 (2022年4月1日から2023年3月31日まで)		2023年度 (2023年4月1日から2024年3月31日まで)	
	金 額		金 額	
<b>経常収益</b>	<b>4,803,400</b>		<b>4,763,633</b>	
保険料等収入	3,203,693		2,827,246	
再保険収入	3,194,937		2,817,213	
資産運用収益	8,755		10,032	
利息及び配当金等収入	1,538,977		1,861,999	
預金利息	988,501		1,160,750	
有価証券利息・配当	6,137		15,127	
貸付金利息	855,613		1,008,516	
不動産賃貸料	59,579		64,054	
その他利息配当	43,971		44,616	
金銭の信託運用益	23,199		28,436	
売却目的有価証券運用益	2,335		1,068	
有価証券売却益	—		47	
有価証券償還益	343,043		313,022	
為替差益	170,717		43,636	
貸倒引当金戻入額	33,925		264,090	
その他運用収益	—		2,205	
特別勘定資産運用益	454		568	
その他経常収入	60,729		76,610	
年金特約取扱受入金	11,451		12,351	
保険金据置受入金	29,064		24,819	
退職給付引当金戻入	11,749		28,595	
その他経常収益	8,464		8,621	
<b>経常費用</b>	<b>4,520,345</b>		<b>4,532,622</b>	
保険金等支払	2,805,089		2,764,394	
保険	643,750		616,544	
保年給	636,191		651,219	
給約返戻金	451,704		427,969	
解約返戻金	961,467		957,582	
その他返戻金	110,332		109,971	
再保料	1,642		1,107	
責任準備金等繰入額	432,606		529,861	
支払準備金繰入額	4,083		9,730	
責任準備金繰入額	428,472		520,086	
社員配当金積立利息繰入	50		43	
資産運用費用	755,303		704,265	
支払利息	40,266		40,481	
売却目的有価証券運用損	33		—	
有価証券売却損	59,172		81,824	
有価証券評価損	4,536		3,998	
有価証券償還損	900		258	
金融派生商品費用	601,687		542,794	
貸倒引当金繰入額	1,267		—	
貸付金償却	60		—	
貸用不動産等減価償却費用	8,979		9,252	
その他運用費用	26,768		25,656	
特別勘定資産運用損	11,630		—	
事業の他経常費用	398,165		414,139	
その他経常費用	129,180		119,960	
保険金据置支払	56,636		46,460	
減価償却	37,039		35,233	
その他経常費用	30,564		32,767	
その他経常費用	4,940		5,499	
<b>経常利益</b>	<b>283,055</b>		<b>231,010</b>	
<b>特別利益</b>	<b>3,280</b>		<b>305</b>	
固定資産等処分益	2,782		305	
子会社及び関連会社清算益	498		—	
<b>特別損失</b>	<b>209,892</b>		<b>72,060</b>	
固定資産等処分損失	3,041		6,246	
減損	565		2,114	
子会社株式及び関連会社株式評価損	1,602		—	
子会社株式及び関連会社株式売却損	—		476	
子会社及び関連会社清算損	—		30	
子会社及び関連会社整理損	—		5,014	
価格変動準備金繰入額	202,957		55,872	
社会厚生事業増進助成金	1,725		2,306	
<b>税引前当期純利益</b>	<b>76,444</b>		<b>159,256</b>	
<b>法人税等調整額</b>	<b>51,860</b>		<b>61,665</b>	
<b>法人税等調整額</b>	<b>△79,562</b>		<b>△67,123</b>	
<b>法人税等調整額</b>	<b>△27,702</b>		<b>△5,458</b>	
<b>当期純利益</b>	<b>104,146</b>		<b>164,714</b>	

## 貸借対照表の注記

1. 有価証券（現金及び預貯金・買入金銭債権のうち有価証券に準じるもの及び金銭の信託において信託財産として運用している有価証券を含む）の評価は、売買目的有価証券については3月末日の市場価格等に基づく時価法（売却原価の算定は移動平均法）、満期保有目的の債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、「保険業における「責任準備金対応債券」に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会 業種別監査委員会報告第21号）に基づく責任準備金対応債券については移動平均法による償却原価法（定額法）、子会社株式及び関連会社株式（保険業法第2条第12項に規定する子会社および保険業法施行令第13条の5の2第3項に規定する子法人等のうち子会社を除いたものならびに同条第4項に規定する関連法人等が発行する株式をいう）については移動平均法による原価法、その他有価証券については3月末日の市場価格等に基づく時価法（売却原価の算定は移動平均法）、市場価格のない株式等については移動平均法による原価法によっております。なお、その他有価証券の評価差額については、全部純資産直入法により処理しております。
2. 個人保険・個人年金保険および団体年金保険に設定した小区分（保険種類・資産運用方針等により設定）に対応した債券のうち、負債に応じたデュレーションのコントロールを図る目的で保有するものについては、「保険業における「責任準備金対応債券」に関する当面の会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会 業種別監査委員会報告第21号）に基づき、責任準備金対応債券に区分しております。  
なお、個人保険・個人年金保険および団体年金保険に設定した小区分のうち、一部の小区分については、新契約に対する資産運用方針を変更したことから、従来の小区分を分割し、新たな小区分を当年度より設定しております。  
この変更による貸借対照表および損益計算書への影響はありません。
3. デリバティブ取引の評価は時価法によっております。
4. 土地の再評価に関する法律（平成10年3月31日公布法律第34号）に基づき、事業用の土地の再評価を行っております。なお、評価差額については、評価差額に係る税金相当額を「再評価に係る繰延税金負債」として負債の部に計上し、これを控除した金額を「土地再評価差額金」として純資産の部に計上しております。  
再評価を行った年月日 2000年3月31日  
同法律第3条第3項に定める再評価の方法  
土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第1号に定める「地価公示法の規定により公示された価格」に奥行補正等の合理的な調整を行って算定  
なお、2004年1月1日付の合併により安田生命保険相互会社から承継した土地再評価差額金に係る再評価の年月日および方法は次のとおりであります。  
再評価を行った年月日 2001年3月31日  
同法律第3条第3項に定める再評価の方法  
土地の再評価に関する法律施行令（平成10年3月31日公布政令第119号）第2条第1号に定める「地価公示法の規定により公示された価格」に奥行補正等の合理的な調整を行って算定したほか、第5号に定める「鑑定評価」に基づいて算出
5. 有形固定資産の減価償却の方法は、定率法（ただし、建物については定額法）によっております。
6. 外貨建資産・負債（子会社株式及び関連会社株式は除く）は、決算日の為替相場により円換算しております。なお、子会社株式及び関連会社株式は、取得時の為替相場により円換算しております。
7. 貸倒引当金は、資産の自己査定基準および償却・引当基準に則り、次のとおり計上しております。破産、民事再生等、法的・形式的な経営破綻の事実が発生している債務者（以下「破綻先」という）に対する債権および実質的に経営破綻に陥っている債務者（以下「実質破綻先」という）に対する債権については、下記直接減額後の債権額から担保の回収可能見込額および保証による回収可能見込額を控除し、その残額を計上しております。また、現状、経営破綻の状況にはないが、今後経営破綻に陥る可能性が大きいと認められる債務者に対する債権については、債権額から担保の回収可能見込額および保証による回収可能見込額を控除し、その残額のうち、債務者の支払能力を総合的に判断し必要と認められる額を計上しております。上記以外の債権については、過去の一定期間における貸倒実績等から算出した貸倒実績率を債権額に乗じた額を計上しております。  
すべての債権は、資産の自己査定基準に基づき、関連部署が資産査定を実施し、当該部署から独立した資産監査部署が査定結果を監査しており、その査定結果に基づいて上記の引当を行っております。  
なお、破綻先および実質破綻先に対する担保・保証付債権等については、債権額から担保の評価額および保証等による回収が可能と認められる額を控除した残額を取立不能見込額として債権額から直接減額しており、その金額は13百万円であります。
8. 退職給付引当金は、従業員の退職給付に備えるため、当年度末における退職給付債務見込額および年金資産見込額に基づいて計上しております。  
退職給付債務および退職給付費用の処理方法は次のとおりであります。  
退職給付見込額の期間帰属方法 給付算定式基準  
数理計算上の差異の処理年数 10年

過去勤務費用の処理年数 10年

なお、当年度末においては、年金資産見込額が退職給付債務見込額を上回っているため、退職給付引当金の残高はありません。

9. 価格変動準備金は、保険業法第 115 条の規定により算出した額を計上しております。
10. ヘッジ会計の方法は、「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第 10 号）に従い、主に、貸付金に対するキャッシュ・フローのヘッジとして金利スワップの特例処理、外貨建債券に対する為替変動リスクのヘッジとして為替予約による時価ヘッジおよび通貨スワップによる繰延ヘッジ、外貨建貸付金および外貨建社債に対する為替変動リスクのヘッジとして通貨スワップによる振当処理を行っております。
- なお、2009 年度より保険契約に係る金利変動リスクをヘッジする目的で金利スワップ取引を利用しており、「保険業における金融商品会計基準適用に関する会計上及び監査上の取扱い」（日本公認会計士協会 業種別委員会実務指針第 26 号）に基づき繰延ヘッジ処理を行っております。ヘッジ有効性の評価は、ヘッジ対象とヘッジ手段双方の理論価格の算定に影響を与える金利の状況を検証することにより行っております。
11. 責任準備金は、期末時点において、保険契約上の責任が開始している契約について、保険契約に基づく将来における債務の履行に備えるため、保険業法第 116 条第 1 項に基づき、保険料及び責任準備金の算出方法書（保険業法第 4 条第 2 項第 4 号）に記載された方法に従って計算し、責任準備金を積み立てております。
- 責任準備金のうち保険料積立金については、次の方式により計算しています。
- (1) 標準責任準備金の対象契約については、内閣総理大臣が定める方式（平成 8 年大蔵省告示第 48 号）
  - (2) 標準責任準備金の対象とならない契約については、平準純保険料式
- また、金融庁に認可を受けた算出方法書に基づき積み立てられた責任準備金では、算出方法書の計算前提（予定発生率・予定利率等）に基づく将来の予定キャッシュ・フローの見積りが、直近の実績と大きく乖離することにより、将来の債務の履行に支障を来すおそれがあると認められる場合に、保険業法施行規則第 69 条第 5 項に基づき、追加の責任準備金を計上する必要があります。この規定に基づき以下を積み立てております。
- ・ 1995 年 9 月 2 日以降に契約締結した一時払養老保険契約を対象として 2014 年度において積み立てたもの
  - ・ 1998 年 4 月 2 日以降に契約締結した一時払個人年金保険契約を対象として 2017 年度において積み立てたもの
  - ・ 1999 年 4 月 1 日以前に契約締結した個人年金保険契約（上記の一時払個人年金保険契約を除く）を対象として、予定利率 2.00%を用いて保険料積立金を計算したことにより生じた差額を 2020 年度からの 2 年間にわたって積み立てたもの
  - ・ 変額保険契約を対象として 2014 年度および 2023 年度において積み立てたもの
- 2014 年度において変額保険契約を対象として積み立てておりましたが、当年度において 64,721 百万円の追加積み立てを行いました。この結果、経常利益および税引前当期純剰余がそれぞれ 64,721 百万円減少しております。
- 責任準備金のうち危険準備金については、保険業法第 116 条及び保険業法施行規則第 69 条第 1 項第 3 号に基づき、保険契約に基づく将来の債務を確実に履行するため、将来発生が見込まれる危険に備えて積み立てております。
12. 既発生未報告支払備金（まだ支払事由の発生の報告を受けていないが保険契約に規定する支払事由が既に発生したと認める保険金等をいう。以下同じ）については、新型コロナウイルス感染症と診断され、宿泊施設または自宅にて医師等の管理下で療養をされた場合（以下「みなし入院」という）等に入院給付金等を支払う特別取扱を 2023 年 5 月 8 日以降終了したことにより、平成 10 年大蔵省告示第 234 号（以下「IBNR 告示」という）第 1 条第 1 項本文に基づく計算では適切な水準の額を算出することができないことから、IBNR 告示第 1 条第 1 項ただし書の規定に基づき、以下の方法により算出した額を計上しております。
- （計算方法の概要）
- IBNR 告示第 1 条第 1 項本文に掲げる全ての事業年度の既発生未報告支払備金積立所要額及び保険金等の支払額から、みなし入院に係る額を除外した上で、IBNR 告示第 1 条第 1 項本文と同様の方法により算出しております。
- なお、前事業年度末においては、当該みなし入院に係る額の代わりに、重症化リスクの高い方以外のみなし入院に係る額を除外しておりましたが、当事業年度中にみなし入院の入院給付金の取扱いを終了したことにより、当該みなし入院に係る額を除外して算出する方法に見直しております。
13. 消費税および地方消費税の会計処理は、税抜方式によっております。ただし、資産に係る控除対象外消費税等のうち、税法に定める繰延消費税等については、その他資産に計上し 5 年間で均等償却し、繰延消費税等以外のものについては、発生年度に費用処理しております。
14. 無形固定資産に計上している自社利用のソフトウェアの減価償却の方法は、利用可能期間に基づく定額法により行っております。
15. 当年度における金融商品の状況に関する事項、金融商品の時価等に関する事項および金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項は、次のとおりであります。
- (1) 金融商品の状況に関する事項
- 保険業法第 118 条第 1 項に規定する特別勘定以外の勘定である一般勘定の資産運用は、経済価値で評価した資産と負債の差額であるサープラスを健全性指標の一つとして捉え、サープラスの変動性（リスク）に着目するサープラス・マネジメント型 A L M によっております。

この方針に基づき、具体的な金融資産として、主に有価証券および貸付金に投資しております。有価証券は、主として債券、株式および投資信託等で保有しており、貸付金は、主に国内の取引先に対する貸付であります。

また、デリバティブについては、運用資産、保険負債または社債のリスクに対する主要なヘッジ手段と位置付けており、主に、ヘッジ目的で利用しております。ヘッジ会計の方法は、「金融商品に関する会計基準」（企業会計基準第10号）に従い、主に、貸付金に対するキャッシュ・フローのヘッジとして金利スワップの特例処理、外貨建債券に対する為替変動リスクのヘッジとして為替予約による時価ヘッジおよび通貨スワップによる繰延ヘッジ、外貨建貸付金および当社が発行した外貨建社債に対する為替変動リスクのヘッジとして通貨スワップによる振当処理、金利スワップによる保険負債の金利リスクヘッジを行っております。

なお、有価証券は市場リスク（金利の変動リスク、為替の変動リスクおよび価格変動リスク等）および信用リスク、貸付金は信用リスクおよび金利の変動リスク、デリバティブ取引は市場リスクおよび信用リスクに晒されております。

当社が発行した外貨建社債は、為替の変動リスクに晒されております。

金利の変動リスクの管理に関しては、サープラス・マネジメントの観点から、超長期債購入による持続的・安定的な資産デュレーションの長期化および金利スワップによる保険負債の金利リスクヘッジ等により、負債も含めた経済価値ベースの変動リスクを管理しております。為替の変動リスクの管理に関しては、リスク水準の適切なコントロールのため必要に応じ為替予約等を利用し、為替リスクのヘッジを行っております。価格変動リスクを含めた市場リスクの管理に関しては、有価証券やデリバティブ取引について残高および損益状況を一元的に管理しているほか、適宜、監視枠等を設定することで損失を一定範囲に収める仕組みを導入しております。

さらに、当社ではVaR手法による最大予想損失額の測定に加えて、通常の予測を超えた急激な市場変動が発生する事態も想定して、ストレステストを定期的に行っております。また、これらの損益状況やルールの遵守状況は、資産運用リスク管理部署が監視し、リスク管理検証委員会に定期的に（緊急時は遅滞なく）報告を行うほか、重要なものは取締役会等に報告しております。

信用リスクの管理にあたっては、個別取引ごとに、リスクを慎重に見極め、安全性が高いと判断される対象に限定して運用を行っております。なお、信用リスク判断が特に重要な企業向け貸付については、審査管理部署において、厳正な審査体制の確保、信用供与先に対するモニタリング、企業審査手法を活用した社内信用格付制度を実施するとともに、重要度の高い案件については、投融资検討会議等で慎重に検討のうえ決裁する体制となっております。また、リスクが特定企業・グループ等に集中することのないよう信用度に応じた与信枠を設定し、管理を行う等運用先の分散を図っております。

デリバティブ取引に関しては、利用方針等を規定化するとともに、取引種類別の残高制限および取引先ごとの与信枠を設定するなどしてリスクを抑制するとともに、取引を執行する部署と事務管理部署を分離し、内部牽制が働く組織体制をとり、適切なリスク管理を行っております。

## (2) 金融商品の時価等に関する事項

当年度末における主な金融資産および金融負債に係る貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、現金は注記を省略しており、譲渡性預金を除く預貯金、売現先勘定および債券貸借取引受入担保金は、約定期間が短期であることから、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、注記を省略しております。

(単位:百万円)

	貸借対照表 計上額	時価	差額
預貯金	16,995	16,995	—
その他有価証券（譲渡性預金）	16,995	16,995	—
買入金銭債権	160,302	155,836	△4,466
満期保有目的の債券	155,385	150,919	△4,466
その他有価証券	4,916	4,916	—
金銭の信託	114,117	114,117	—
その他有価証券	114,117	114,117	—
有価証券	39,464,593	39,028,755	△435,838
売買目的有価証券	513,558	513,558	—
満期保有目的の債券	3,086,357	3,360,296	273,939
責任準備金対応債券	14,751,534	14,067,870	△683,663
子会社株式及び関連会社株式	98,991	72,876	△26,114
その他有価証券	21,014,152	21,014,152	—
貸付金	3,881,450	3,905,640	24,189
保険約款貸付	163,870	163,870	—
一般貸付	3,717,579	3,741,769	24,189
貸倒引当金(*1)	△7,996	—	—
	3,873,454	3,905,640	32,185
社債	640,735	641,039	304

借入金	271,600	256,279	△15,320
金融派生商品(*2)	(265,420)	(265,420)	—
ヘッジ会計が適用されていないもの	(15,570)	(15,570)	—
ヘッジ会計が適用されているもの	(249,849)	(249,849)	—

(\*1) 貸付金に対応する一般貸倒引当金および個別貸倒引当金を控除しております。

(\*2) デリバティブ取引によって生じた正味の債権・債務は純額で表示しており、合計で正味の債務となる項目については、( ) で示しております。

(\*3) 非上場株式等の市場価格のない株式等及び組合出資等については、「金融商品の時価等の開示に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第19号)第5項及び「時価の算定に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第31号。以下「時価算定会計基準適用指針」という)第24-16項に従い、金融商品の時価等及び時価のレベルごとの内訳等に関する事項で開示している表中の有価証券に含めておりません。なお、市場価格のない株式等の当年度末における貸借対照表価額は、1,039,135百万円(うち子会社株式及び関連会社株式1,005,971百万円)、組合出資等の当年度末における貸借対照表価額は、29,016百万円であります。また、当年度において、非上場株式等の市場価格のない株式等及び組合出資等について5百万円減損処理を行っております。

(注1) 保有目的ごとの有価証券に関する注記事項

① 売買目的有価証券において、当年度の損益に含まれた評価差額は53,029百万円であります。

② 満期保有目的の債券において、種類ごとの貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。なお、当年度中に売却した満期保有目的の債券はありません。

(単位:百万円)

	種類	貸借対照表計上額	時価	差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	①国債・地方債等	2,702,323	2,948,842	246,519
	②社債	298,747	325,388	26,641
	③その他	126,785	129,794	3,008
	合計	3,127,855	3,404,025	276,169
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	①国債・地方債等	—	—	—
	②社債	15,437	15,289	△147
	③その他	98,450	91,901	△6,548
	合計	113,887	107,191	△6,696

(\* ) 本表には、金融商品取引法上の有価証券として取り扱うことが適当と認められるものを含めております。

③ 責任準備金対応債券の目標デュレーション達成のための当年度中の売却額は381,601百万円であり、売却益の合計額は25,298百万円、売却損の合計額は317百万円であります。また、責任準備金対応債券において、種類ごとの貸借対照表計上額、時価およびこれらの差額については、次のとおりであります。

(単位:百万円)

	種類	貸借対照表計上額	時価	差額
時価が貸借対照表計上額を超えるもの	①国債・地方債等	6,456,305	6,884,897	428,591
	②社債	13,577	14,869	1,291
	③その他	673,877	683,203	9,325
	合計	7,143,761	7,582,969	439,208
時価が貸借対照表計上額を超えないもの	①国債・地方債等	5,606,088	4,690,653	△915,434
	②社債	27,325	24,877	△2,448
	③その他	1,974,358	1,769,369	△204,988
	合計	7,607,772	6,484,900	△1,122,871

④ その他有価証券の当年度中の売却額は2,752,039百万円であり、売却益の合計額は287,724百万円、売却損の合計額は81,506百万円であります。また、その他有価証券において、種類ごとの取得原価または償却原価、貸借対照表計上額およびこれらの差額については、次のとおりであります。

(単位:百万円)

	種類	取得原価 または 償却原価	貸借対照表 計上額	差額
貸借対照表計上額が取得原価または償却原価を超えるもの	(1) 株式	1,534,223	6,543,269	5,009,046
	(2) 債券	1,643,023	1,771,911	128,887
	①国債・地方債等	1,127,541	1,205,518	77,976
	②社債	515,482	566,393	50,910
	(3) その他	6,473,005	7,660,196	1,187,190
	合計	9,650,252	15,975,377	6,325,124

貸借対照表計上額が取得原価または償却原価を超えないもの	(1) 株式	14,053	12,561	△1,491
	(2) 債券	1,696,259	1,620,955	△75,304
	① 国債・地方債等	649,956	610,865	△39,090
	② 社債	1,046,303	1,010,089	△36,213
	(3) その他	3,845,371	3,541,287	△304,084
	合計	5,555,684	5,174,804	△380,880

(\*) 本表には、金融商品取引法上の有価証券として取り扱うことが適当と認められるものを含めております。

⑤ 上記の表中にある「取得原価または償却原価」は減損処理後の帳簿価額であります。当年度において、責任準備金対応債券について3,904百万円、その他有価証券で時価のある株式等について88百万円減損処理を行っております。

(注2) 金銭債権および満期のある有価証券の決算日後の償還予定額

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
預貯金 (譲渡性預金)	16,995	—	—	—	—	—
買入金銭債権	—	—	—	—	—	160,302
貸付金(*)	437,791	751,193	584,642	636,969	743,668	555,382
有価証券	441,406	1,440,771	3,069,660	3,162,383	6,240,297	15,847,592
満期保有目的の 債券	193,355	621,455	249,891	20,105	575,871	1,425,678
責任準備金対応 債券	17,459	67,926	635,280	1,494,365	3,016,494	9,520,008
その他有価証券 のうち満期があ るもの	230,591	751,390	2,184,488	1,647,912	2,647,931	4,901,905
合計	896,193	2,191,964	3,654,302	3,799,352	6,983,966	16,563,277

(\*) 貸付金のうち、破産更生債権等、償還予定額が見込めない7,932百万円は含めておりません。

(\*) 貸付金のうち、保険約款貸付については、償還期限がないので含めておりません。

(注3) 社債および借入金の決算日後の返済予定額

(単位:百万円)

	1年以内	1年超 3年以内	3年超 5年以内	5年超 7年以内	7年超 10年以内	10年超
社債	—	—	—	—	—	640,735
借入金	—	—	—	—	—	271,600
合計	—	—	—	—	—	912,335

(3) 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に用いたインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：同一の資産又は負債の活発な市場における（無調整の）相場価格により算定した時価

レベル2の時価：レベル1のインプット以外の直接又は間接的に観察可能なインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：重要な観察できないインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

① 時価をもって貸借対照表計上額とする金融資産及び金融負債

(単位:百万円)

区分	時価			合計
	レベル1	レベル2	レベル3	
預貯金（譲渡性預金）	—	16,995	—	16,995
買入金銭債権	—	4,916	—	4,916
その他有価証券	—	4,916	—	4,916
金銭の信託	—	114,117	—	114,117
その他有価証券	—	114,117	—	114,117
有価証券	11,337,844	9,656,539	73,830	21,068,214
売買目的有価証券	345,825	167,733	—	513,558

国債・地方債等	130,966	—	—	130,966
社債	—	75,362	—	75,362
株式	112,745	—	—	112,745
その他	102,113	92,370	—	194,484
その他有価証券	10,992,019	9,488,805	73,830	20,554,655
国債・地方債等	1,706,137	110,246	—	1,816,384
社債	—	1,576,482	—	1,576,482
株式	6,553,623	2,207	—	6,555,831
その他	2,732,258	7,799,868	73,830	10,605,957
金融派生商品	739	46,000	—	46,740
通貨関連	—	26,879	—	26,879
金利関連	—	18,956	—	18,956
株式関連	241	—	—	241
債券関連	498	164	—	662
資産計	11,338,584	9,838,569	73,830	21,250,984
金融派生商品	80	312,080	—	312,160
通貨関連	—	225,047	—	225,047
金利関連	—	86,914	—	86,914
株式関連	5	—	—	5
債券関連	75	118	—	193
負債計	80	312,080	—	312,160

(\*)時価算定会計基準適用指針第 24-7 項に従い、基準価額を時価とみなす投資信託については、上記表には含めておりません。貸借対照表における当該投資信託の金額は 459,496 百万円であります。当該投資信託の当期首残高から当期末残高への調整表は以下のとおりです。

(単位：百万円)

	時価算定会計基準適用指針第 24-3 項を適用し基準価額を時価とみなす投資信託
当期首残高	320,972
当期の損益又は評価・換算差額等への計上	
その他有価証券評価差額金に計上	50,145
購入、売却及び償還	
購入	91,730
売却	△3,352
当期末残高	459,496

また、同適用指針第 24-3 項の取扱いを適用した投資信託の、解約等に関する制限の主な内容及び貸借対照表計上額は、任意解約等が認められていない投資信託 459,496 百万円であります。

②時価をもって貸借対照表計上額としない金融資産及び金融負債

(単位：百万円)

区分	時価			合計
	レベル 1	レベル 2	レベル 3	
買入金銭債権	—	150,919	—	150,919
満期保有目的の債券	—	150,919	—	150,919
有価証券	14,883,345	2,617,699	—	17,501,044
満期保有目的の債券	2,790,357	569,939	—	3,360,296
国債・地方債等	2,790,357	158,484	—	2,948,842
社債	—	340,678	—	340,678
その他	—	70,775	—	70,775
責任準備金対応債券	12,020,110	2,047,760	—	14,067,870
国債・地方債等	11,575,551	—	—	11,575,551
社債	—	39,747	—	39,747
その他	444,559	2,008,013	—	2,452,572
子会社株式及び関連会社株式	72,876	—	—	72,876
貸付金	—	—	3,905,640	3,905,640
保険約款貸付	—	—	163,870	163,870
一般貸付	—	—	3,741,769	3,741,769
資産計	14,883,345	2,768,619	3,905,640	21,557,604
社債	—	641,039	—	641,039

借入金	—	256,279	—	256,279
負債計	—	897,319	—	897,319

(注1) 時価の算定に用いた評価技法及びインプットの説明

①預貯金、買入金銭債権、金銭の信託及び有価証券

預貯金、買入金銭債権、金銭の信託及び有価証券については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しております。主に上場株式や国債がこれに含まれます。公表された相場価格を用いていたとしても市場が活発でない場合にはレベル2の時価に分類しております。主に譲渡性預金、地方債、社債がこれに含まれます。

相場価格が入手できない場合には、将来キャッシュ・フローを現在価値に割り引く方法により算定された理論価格または情報ベンダーや取引相手先から入手した3月末日の時価等によっております。評価にあたっては観察可能なインプットを最大限利用しております。算定にあたり重要な観察できないインプットを用いている場合には、レベル3の時価に分類しております。

相場価格が存在しない投資信託について、解約又は買戻請求に関して市場参加者からリスクの対価を求められるほどの重要な制限がない場合には基準価額を時価とし、レベル2の時価に分類しております。

②金融派生商品

金融派生商品については、活発な市場における無調整の相場価格を利用できるものはレベル1の時価に分類しており、主に株価指数先物、債券先物等がこれに含まれます。

ただし、大部分の金融派生商品は店頭取引であり、公表された相場価格が存在しません。そのため外国為替予約の時価については3月末日のTTM、WMロイターレート、割引レート等を基準とした理論価格、通貨スワップ取引、金利スワップ取引等の時価については情報ベンダーが提供する価格によっており、当該時価はレベル2の時価に分類しております。

なお、通貨スワップの振当処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸付金および社債と一体として処理されているため、その時価は、当該貸付金および社債の時価に含めて記載しております。また、金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている貸付金と一体として処理されているため、その時価は、当該貸付金の時価に含めて記載しております。

③貸付金

一般貸付の時価については、主に、将来キャッシュ・フローを現在価値に割り引いた価格によっており、観察できないインプットを使用していることから、レベル3の時価に分類しております。

なお、破綻先、実質破綻先および破綻懸念先に対する貸付金については、直接減額前の帳簿価額から貸倒見積高を控除した額を時価としております。

また、保険約款貸付は、当該貸付を解約返戻金の範囲内に限るなどの特性により返済期限を設けておらず、返済見込期間および金利条件等から、時価は帳簿価額と近似しているものと想定されるため、当該帳簿価額を時価としており、レベル3の時価に分類しております。

④社債

当社の発行する社債については、3月末日の情報ベンダーが提供する価格によっております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

⑤借入金

当社の借入金については、借入金を裏付けとして発行される社債の3月末日の情報ベンダーが提供する価格によっております。当該時価はレベル2の時価に分類しております。

(注2) 時価をもって貸借対照表計上額とする金融資産及び金融負債のうちレベル3の時価に関する情報

①重要な観察できないインプットに関する定量的情報

有価証券の「売買目的有価証券」および「その他有価証券」にてレベル3の時価となるものがありますが、これらは、第三者から入手した価格を調整せずに使用しているため、記載していません。

②当期首残高から当期末残高への調整表、当期の損益に認識した評価損益

(単位:百万円)

	有価証券		合計
	売買目的有価証券	その他有価証券	
	その他	その他	
当期首残高	1,965	73,753	75,719
当期の損益又は評価・換算差額等への計上			
売買目的有価証券運用益に計上	34	—	34
その他有価証券評価差額金に計上	—	5,785	5,785
購入、売却、発行及び決済等			
売却	△ 2,000	—	△ 2,000
償還	—	△ 5,709	△ 5,709
当期末残高	—	73,830	73,830

当期の損益に計上した額のうち貸借対照表日において保有する金融資産及び金融負債の評価損益	-	-	-
---	---	---	---

③時価の評価プロセスの説明

第三者から入手した相場価格を利用する場合においても、利用されている評価技法及びインプットの確認や類似の金融商品の時価との比較等の適切な方法により価格の妥当性を検証しております。検証結果は毎期リスク管理部署に報告され、時価の算定の方針及び手続に関する適正性が確保されております。

④重要な観察できないインプットを変化させた場合の時価に対する影響に関する説明

第三者から入手した価格を調整せずに使用しているため、記載しておりません。

16. 当社では、東京都その他の地域において賃貸用のオフィスビル等を有しており、当年度末における当該賃貸等不動産の貸借対照表価額は632,277百万円、時価は997,134百万円であります。なお、時価の算定にあたっては、主として不動産鑑定士による鑑定評価（指標等を用いて調整を行ったものを含む）によっております。
17. 債権のうち、破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権、三月以上延滞債権並びに貸付条件緩和債権の額は、21,510百万円であります。なお、それぞれの内訳は以下のとおりであります。
- 債権のうち、破産更生債権及びこれらに準ずる債権は405百万円であります。
- 上記取立不能見込額の直接減額は13百万円であります。
- なお、破産更生債権及びこれらに準ずる債権とは、破産手続開始、更生手続開始又は再生手続開始の申立て等の事由により経営破綻に陥っている債務者に対する債権及びこれらに準ずる債権であります。
- 債権のうち、危険債権額は11,832百万円あります。
- なお、危険債権とは、債務者が経営破綻の状態には至っていないが、財政状態及び経営成績が悪化し、契約に従った債権の元本の回収及び利息の受取りができない可能性の高い債権で、破産更生債権及びこれらに準ずる債権に該当しない債権であります。
- 債権のうち、三月以上延滞債権はありません。
- なお、三月以上延滞債権とは、元本又は利息の支払が、約定支払日の翌日を起算日として三月以上延滞している貸付金で破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権に該当しないものであります。
- 債権のうち、貸付条件緩和債権額は9,272百万円あります。
- なお、貸付条件緩和債権とは、債務者の経営再建又は支援を図ることを目的として、金利の減免、利息の支払猶予、元本の返済猶予、債権放棄その他債務者に有利となる取決めを行った貸付金で、破産更生債権及びこれらに準ずる債権、危険債権、三月以上延滞債権に該当しないものであります。
18. 有形固定資産の減価償却累計額は、471,079百万円あります。
19. 保険業法第118条第1項の規定による特別勘定の資産の額は、607,204百万円あります。
- なお、同勘定の負債の額も同額であります。
20. 保険業法施行規則第30条第2項に規定する金額は、4,338,194百万円あります。
21. 子会社等に対する金銭債権の総額は、72,347百万円、金銭債務の総額は、4,702百万円あります。
22. 貸借対照表に計上した有形固定資産および無形固定資産のほか、リース契約により使用している重要な有形固定資産として電子計算機およびその周辺機器等があります。
23. 社員配当準備金の異動状況は次のとおりであります。
- |             |            |
|-------------|------------|
| 当期首現在高      | 288,339百万円 |
| 前期剰余金よりの繰入額 | 144,240百万円 |
| 当期社員配当金支払額  | 143,093百万円 |
| 利息による増加等    | 58百万円      |
| 当期末現在高      | 289,545百万円 |
24. 基金を50,000百万円償却したことに伴い、同額の基金償却準備金を保険業法第56条の規定による基金償却積立金へ振り替えております。
25. 担保に供されている資産の額は、有価証券380,015百万円あります。
26. 消費貸借契約により貸し付けている有価証券（現金担保付債券貸借取引による有価証券を含む）の貸借対照表価額は5,657,341百万円、売現先取引により買戻し条件付で売却した有価証券の貸借対照表価額は264,703百万円あります。
27. 貸付金に係るコミットメントライン契約等の融資未実行残高は、55,445百万円あります。
28. 負債の部の社債は、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付社債および外貨建劣

後特約付社債であります。

29. 負債の部の借入金は、他の債務よりも債務の履行が後順位である旨の特約が付された劣後特約付借入金であります。

30. 退職給付に関する事項は次のとおりであります。

(1) 採用している退職給付制度の概要

当社は、確定給付型の制度として、確定給付企業年金制度および退職一時金制度を設けております。また、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を設けております。

(2) 確定給付制度

①退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

期首における退職給付債務	234,467百万円
勤務費用	9,860百万円
利息費用	2,110百万円
数理計算上の差異の当期発生額	2,353百万円
退職給付の支払額	△ 15,827百万円
期末における退職給付債務	232,964百万円

②年金資産の期首残高と期末残高の調整表

期首における年金資産	432,636百万円
期待運用収益	3,554百万円
数理計算上の差異の当期発生額	181,745百万円
事業主からの拠出額	2,331百万円
退職給付の支払額	△ 11,000百万円
期末における年金資産	609,267百万円

③退職給付債務および年金資産と貸借対照表に計上された退職給付引当金および前払年金費用の調整表

積立型制度の退職給付債務	232,305百万円
年金資産	△ 609,267百万円
	△ 376,961百万円
非積立型制度の退職給付債務	658百万円
未認識数理計算上の差異	216,372百万円
未認識過去勤務費用	14,072百万円
退職給付引当金 (△は前払年金費用)	△ 145,858百万円

④退職給付に関連する損益

勤務費用	9,860百万円
利息費用	2,110百万円
期待運用収益	△ 3,554百万円
数理計算上の差異の当期の費用処理額	△ 27,165百万円
過去勤務費用の当期の費用処理額	△ 2,688百万円
確定給付制度に係る退職給付費用	△ 21,437百万円

⑤年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は次のとおりであります。

債券	3.2%
株式	56.2%
生命保険一般勘定	16.3%
共同運用資産	14.8%
投資信託	3.0%
現金及び預金	2.2%
その他	4.3%
合計	100.0%

年金資産合計には、退職給付信託が67.3%含まれております。

⑥長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在および予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在および将来期待される長期の収益率を考慮しております。

⑦数理計算上の計算基礎に関する事項

当年度末における主要な数理計算上の計算基礎は次のとおりであります。

割引率	0.9%
長期期待運用収益率	
確定給付企業年金	2.0%
退職給付信託	0.0%

(3) 確定拠出制度

当社の確定拠出制度への要拠出額は1,192百万円であります。

31. 子会社等の株式等は、1,104,962百万円であります。

32. 繰延税金資産の総額は、976,479百万円、繰延税金負債の総額は、1,649,028百万円であります。繰延税金資産のうち評価性引当額として控除した額は、7,114百万円であります。

繰延税金資産の発生の主な原因別内訳は、保険契約準備金576,154百万円および価格変動準備金315,445百万円であります。

繰延税金負債の発生の主な原因別内訳は、その他有価証券の評価差額1,618,266百万円であります。

当年度における法定実効税率は27.96%であり、法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間の差異の主な内訳は、社員配当準備金に係る△26.24%であります。

33. 保険業法施行規則第73条第3項において準用する同規則第71条第1項に規定する再保険を付した部分に相当する支払備金（以下「出再支払備金」という）の金額は13百万円、同規則第71条第1項に規定する再保険を付した部分に相当する責任準備金（以下「出再責任準備金」という）の金額は4,955百万円であります。

34. 会計上の見積りの開示に関する会計基準（企業会計基準第31号）に基づいて識別した重要な会計上の見積りは以下の通りです。

(1) 子会社及び関連会社株式の減損

当年度の貸借対照表の「有価証券」に、子会社株式及び関連会社株式1,104,962百万円を計上しております。

子会社及び関連会社株式は、実質価額に基づいて減損判定を行います。原則として、実質価額は期末日の純資産価額に基づき算定しますが、必要な場合は、将来キャッシュ・フロー等の主要な仮定を使用して算定された価額を実質価額としております。

上記の仮定の予測は高い不確実性を伴い、翌年度において将来キャッシュ・フローの見積りに重要な影響を及ぼす可能性があります。

なお、判定の結果、減損損失は計上しておりません。

## 損益計算書の注記

1. 保険料は、原則として、収納があり、保険契約上の責任が開始しているものについて、当該収納した金額により計上しております。

なお、収納した保険料のうち、期末時点において未経過となっている期間に対応する部分については、保険業法第116条及び保険業法施行規則第69条第1項第2号に基づき、責任準備金に積み立てております。

保険金等支払金（再保険料を除く）は、保険約款に基づく支払事由が発生し、当該約款に基づいて算定された金額を支払った契約について、当該金額により計上しております。

なお、保険業法第117条及び保険業法施行規則第72条に基づき、期末時点において支払義務が発生したもの、または、まだ支払事由の報告を受けていないものの支払事由が既に発生しているものと認められるもののうち、それぞれ保険金等の支出として計上していないものについて、支払備金を積み立てております。

2. 子会社等との取引による収益の総額は、38,108百万円、費用の総額は、45,081百万円であります。
3. 有価証券売却益の主な内訳は、国債等債券18,154百万円、株式等59,682百万円、外国証券234,335百万円であります。  
有価証券売却損の主な内訳は、国債等債券502百万円、株式等14,417百万円、外国証券66,518百万円であります。  
有価証券評価損の内訳は、株式等93百万円、外国証券3,904百万円であります。
4. 支払備金繰入額の計算上、足し上げられた出再支払備金戻入額の金額は9百万円、責任準備金繰入額の計算上、足し上げられた出再責任準備金戻入額の金額は8,502百万円であります。
5. 「金融派生商品費用」には、評価益が121,909百万円含まれております。
6. 当年度における減損損失に関する事項は、次のとおりであります。

### (1) 資産のグルーピング方法

保険事業等の用に供している不動産等については、保険事業等全体で1つの資産グループとしております。また、保険事業等の用に供していない賃貸不動産等および遊休不動産等については、それぞれの物件ごとに1つの資産グループとしております。

### (2) 減損損失の認識に至った経緯

一部の資産グループに著しい収益性の低下または時価の下落が見られたことから、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。

### (3) 減損損失を認識した資産グループと減損損失計上額の固定資産の種類ごとの内訳

用途	件数	減損損失(百万円)		
		土地	建物	計
賃貸不動産等	1件	529	869	1,399
遊休不動産等	7件	377	337	714
合計	8件	906	1,207	2,114

### (4) 回収可能価額の算定方法

回収可能価額は、賃貸不動産等については物件により使用価値または正味売却価額を、遊休不動産等については正味売却価額を適用しております。なお、使用価値については見積乖離リスクを反映させた将来キャッシュ・フローを1.71%で割引いて算定しております。また、正味売却価額については不動産鑑定評価基準に基づく鑑定評価額等から処分費用見込額を差し引いた価額、または公示価格等を基準にした評価額等をもとに算定しております。